

# 協会・士会をあげて認知症支援に取り組むために

「認知症の人と家族の会埼玉県支部」と「埼玉県作業療法士会」との協業を先例として

一般社団法人	日本作業療法士協会	常務理事	荻山 和生
一般社団法人	埼玉県作業療法士会	会長	宇田 英幸
	同	副会長	伊藤 伸
	同	認知症地域支援推進部長	倉元 貴志

## 協会と家族の会との出会い

一般社団法人日本作業療法士協会（以下、協会）と公益社団法人認知症の人と家族の会（以下、家族の会）との出会いは2010年10月に遡る。当時の協会理事が、家族の会の理事であり事務局を担当しておられた京都桂川園の鎌田松代氏にお会いしたのが始まりで、それから間もなく高見国生（前）代表理事にもお目にかかり、家族の会が行っている全国調査等アンケートの集計と報告書作成に関わる「調査・研究専門委員会」に参加させていただくこととなった。

その後、2013年7月に認知症関連の医療介護のあり方についてご相談したり、2015年1月には高見代表と中村春基会長との対談が実現し、作業療法士が家

族のお役に立てる視点等についての意見が交わされた（機関誌第37号に掲載）。

協会として4回目の正式訪問は2017年の3月だった。4月に控えていた国際アルツハイマー病協会国際会議（ADI-2017）でのブース出展と今後の協力をお願いも兼ねて訪問したのだが、これはちょうど協会の認知症の人の生活支援推進委員会が全都道府県士会に認知症作業療法推進委員を配置することとし、各士会と協会が連携しながら認知症支援の推進（双方向の情報共有・研修会の開催など）を行うことが決定した時期でもあった。

## 埼玉県士会と家族の会埼玉県支部とのつながり

上述の協会の動きと並行して、2015年、一般社団法人埼玉県作業療法士会（以下、埼玉県士会）では認知症専門研修会を初級・中級・上級と3コース計画し、第1回の中級コースを開催していた。2月に家族の会埼玉県支部から伊藤まつ江氏を講師としてお招きしたことがきっかけとなり、埼玉県士会に若年認知症者のつどいのサポーター協力依頼があった。そして埼玉県士会の担当者がつどいの打ち合わせ会議等に参加したことを契機に、現在の認知症地域推進部の前身である認知症対策推進委員会が埼玉県士会内に立ち上がったのである。当時のメンバーは8名であったが、精力的に研修会や地域支援活動を進め、6月から始まった

若年認知症者のつどいでは、常時2～6名の作業療法士が参加するようになった。地域支援推進部となつてからは上級コース修了者らと共に、①オレンジカフェへの参画、②初期集中支援への参画、③専門研修や講座による人材育成、④認知症サポーター養成講座の開催に加え、⑤家族の会との共催による企画や事業の支援を柱として活動してきた。この時期にはすでに埼玉県士会の中に家族の会との連携の準備は整い始めていた。以後2年間、上級コース修了者の1期生・2期生は、家族の会のつどいや認知症カフェとのつながりを企画するだけでなく、継続的に支援を続けてきた。

## 埼玉県での取り組みを全国の研修会で共有

そのような中、2017年夏、埼玉県支部長であり全国の家族の会の副代表の花俣ふみ代氏から、「埼玉県支部での作業療法士会さんとの（若年性認知症の）本人のつどいの取り組みを、全国のつどいの研修会で紹介したい」「作業療法士さんが専門的評価に基づく関わりで、話せなかった若年性の人があんなに話せるようになって驚いている」「作業療法は利があって害がない」「埼玉県の作業療法士さんに京都で発表してもらおうと思う」と願ってもない言葉をいただいた。

そして2017年12月17日（日）京都二条城の北にある社会福祉会館のホールで全国33支部から若年本人のつどいを担当している世話人ら（作業療法士2名を含む）81名をはじめ、本部・事務局員、埼玉県士会員と協会理事ら合わせて99名が一堂に会して「本人（若年）のつどいを考え、広める研修会」が開催された。

午前は、家族の会埼玉県支部副代表の宮田敏行氏から、埼玉県での若年のつどいの歴史と埼玉県士会との連携、現在の活動状況を紹介された。花俣氏のリクエストもあり、埼玉県士会認知症地域支援推進部からは、県士会の認知症関連活動に関する歩みや、若年のつどいでの作業療法士の役割などが紹介され、作業療法とはどういうものなのか、家族会との協働で県士会と会

員が得たこと、そして作業療法士が目指している地域作りなどが発表された。

午後は、埼玉県福祉部地域包括ケア課主事の新井孝史氏から、埼玉県内の若年性認知症支援コーディネーターの活動として、県と家族の会と県士会の共催による初の企画（スポーツイベント）を紹介された。家族の会鳥取県支部の前田好子氏からは、鳥取県若年認知症サポートセンターの設置から活動までを紹介された。そして本部委員で当事者でもある丹野智文氏から「本人支援やつどい等に期待すること」として、「私にできることを奪わないつどいのあり方を！」という強いメッセージをいただいた後に、7～8名に分かれてのグループディスカッションが行われた。これからの本人・若年のつどいを開催・継続していくためにはどうしたらよいかについて話し合い、ディスカッションの成果を発表して共有した。

ディスカッションの中で、「埼玉県はそのように支援してくれているが、他の都道府県はどうか？ すぐにも作業療法士会の協力を得たいが連絡を取るにはどうしたらよいか？」との声がかこかこで聞かれたため、まとめの時間に「認知症に関する全国都道府県作業療法士会の相談窓口一覧」を配布し好評を得た。

## 全国組織と地方組織＋本人と家族の関係とは

埼玉県士会の活動がこれほどまでに家族の会に共鳴し成功している鍵は、即応力を養う組織力にある。SNSを駆使した即日返信をはじめ、ホームページ更新やアンケート等の作成と集計の素早さ、メールや電話による渉外活動の丁寧さは見事に調和している。上級コース修了要件である「地域支援実践演習」で地域支援事業を計画した受講生が、市町や企業と企画交渉をする際、県士会役員や部員がその下支えをしっかりとしていることがこの強固な関係を築けた要因である。作業療法士が現場で培ってきた力を外部に向ける姿勢、地域作りに尽力する行動力、それらをどう養い、士会・協会としてバックアップするか、そのヒントが埼玉県士会の組織力と研修内容に隠されていることは間違いない。

結びに、現在埼玉県支部副代表として今回発表された熊本県出身の宮田氏の言葉を引用したい。熊本地震により石垣が崩落し、角石のみで支えられた奇跡が注目を浴びた熊本城飯田丸五階櫓の写真を示し、「崩れそうな櫓が本人です。この一本の石垣が家族です。櫓を大きく上から抱え込むようなアーム状の鉄骨が支部のつどいです。そしてそのアームを支えるためにあるこちらの大きな鉄骨のビルのような塊が家族の会です」と。今回の埼玉県士会と家族の会埼玉県支部の共同発表を目の当たりにし、士会と協会もそのような関係となることにより、さらに家族の会との絆と協力が強まり、認知症のご本人とご家族が安心して地域で集える未来が来ることを確信している。



### 「本人（若年）のつどいを考え、広める研修会」を終えて

後列左より、新井孝史（埼玉県福祉部）、工藤元貴（三重県作業療法士）、宇田英幸（埼玉県士会会長）  
中列左より、服部優香理（岐阜県作業療法士）、倉元貴志（埼玉県士会部長）、花俣ふみ代（家族の会副代表）、  
荻山和生（協会理事）、鈴木森夫（家族の会代表理事）、阿部佳世（家族の会事務局長）  
前列左より、内山渚、小林祐子、吉田朋子（いずれも埼玉県士会認知症地域推進支援部副部長） 【敬称略】